様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：３３５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０１９２０

研究課題名（和文）障害児保育における「信頼モデル」に基づく個別の指導計画及び保育記録の様式開発

研究課題名（英文）The proposal on the form of individualized teaching plan and documentation based on credit model in early childhood care and education for children with special needs

研究代表者
吉川　和幸（YOSHIKAWA, KAZUYUKI）

帝京科学大学・教育人間科学部・准教授

研究者番号：３０５２８１８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究を通して以下の点が示された。①保育者は、障害のある子ども一人ひとりの育ちを尊重すると同時に、集団に準拠した子ども理解を構成しており、子ども個々への対応と、集団への対応の両立困難によって生じる葛藤や、現実への不全感が統合保育を困難にしうること。②信頼モデルに基づく個別の指導計画、保育記録の様式を用いた実践は、保育者の子ども理解を再構成し、遊び、人とのかかわり、合理的配慮など、多様な視点から子どもを理解し、目標と指導の手立てを構想しうること。③信頼モデルに基づく子ども理解は、障害の有無を問わず、全ての子どもを対象とした保育の在り方の見直しの契機となりうること。

研究成果の学術的意義や社会的意義
障害のある子どもに対する、保育者の理解が、子ども理解のメディアである計画、記録の様式によって構成されることを示した点、また、従来の幼児教育の保育観と、特別支援教育における保育観を止揚させ、多様性に富んだ子どもたちの集う保育の場における子ども理解を、保育者が再構成するための視点を提示した点が、本研究の学術的意義である。また、個別の指導計画と保育記録の様式の開発、実践を通して、多様な子どもたちが包含されるインクルーシブ教育システム、及び多様な人々が個性、人格を尊重し合える共生社会の実現に向けての方法論について検討した点が、本研究の社会的意義である。

研究成果の概要（英文）：The result of this research showed three findings. First, teachers respect the development of each child with special needs. But their group-oriented belief can cause conflicts and makes inclusive education difficult. Second, through practicing the form of individualized teaching plan and documentation based on credit model, teachers reconstruct their understandings of children with special needs from various perspectives such as play, interpersonal relationship, reasonable accommodation. Third, assessing children based on credit model can be a trigger to reconsider the educational system for all children, regardless of their special needs.

研究分野：障害児保育　特別支援教育

キーワード：障害児保育　特別支援教育　障害のある幼児　個別の指導計画　保育記録　信頼モデル　子ども理解

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

障害児教育実践における子ども理解は、子どもと、その発達を支える実践者の関係性において捉えられ、実践者によって言語的に表現される。それらは、計画、記録、評価の過程を通じ、様々な書類の形式を媒介して表現される。中でも「個別の指導計画」及び「実践記録」は、実践者の子ども理解を構成する主要なメディアである。個別の指導計画や実践記録には、実践者のもつ発達観が表れるだけでなく、その様式が実践者の子どもの見取りに影響を与えていることが推察される（吉川，2014；吉川，2012）。

今日の我が国の障害児教育実践においては、障害に起因して見られる子どもの行動的、心理的な特性を踏まえた支援、すなわち障害特性論に基づく支援が主流となっている。障害特性論に基づく支援の枠組みは、障害のある子どもの生きづらさを軽減するために必要な支援を構想、実現する上で、大きな貢献を果たしてきた。しかし、障害特性論の背景には、要素主義的な発達観があり、発達の基本単位を運動、言語、社会性などの要素に分解し、子どもを理解する傾向を構成している（木下，2015）。このような要素主義的な子ども理解は、心理・発達アセスメントの技術的発展とともに、今日の我が国の障害児教育実践の基調を構成するとともに、特別支援教育制度の推進を背景に、幼稚園等、保育実践の場にも浸透してきている。その結果、個別の指導計画や実践記録の様式も、領域・機能を要素別に記載するものが多く、実践者の子ども理解を方向付けていることが推察される（吉川，2012）。

我が国の保育においては、子どもさながらの主体的な遊びの姿から，ねらいを立ち上げ，環境を通した保育により、包括的に子どもの発達を支えていくという保育観が歴史的に形成されてきたが、障害特性論、要素主義的発達観の浸透により、定型発達の子どもと比較して、特定の行動が「できる/できない」という二項対立的なまなざし（松井・越中・朴・若林・鍛治・八島・山崎，2015）に基づく保育観と拮抗する事態が生じている。このような傾向は、例えば、個別の指導計画において、障害のある子どもの目標に、身辺処理や集団活動への適応に関する内容が多い一方で、遊びを通しての子ども独自の興味・関心の拡がり、表現の充実に関する目標が少ない結果にも表れている(吉川，2014)。従来の保育観と、障害特性論に基づく保育観が拮抗している状況を実践において止揚させることが、幼児期の特別支援教育における重要な課題である。

２．研究の目的

上記の課題を踏まえて、本研究では、保育環境に対する子どもの能動性を前景化し、評価する「信頼モデル」(Carr，2013）を実装した、障害のある子どもの個別の指導計画及び保育記録の様式の開発を行い、幼稚園での実践研究を通して、多様な個性、人格をもつ子どもたちが生活する保育の場において、子ども一人ひとりを中心とした保育を構想、実現するための基盤構築を目的とした。

３．研究の方法

(1) 本研究の理論的基盤に関する文献的検討

本研究の理論的基盤となる、子ども理解における「信頼モデル」「欠損モデル」、「エティック」「イーミック」の相対的視点、発達の社会文化的視点、幼児期における遊びの意義等について、文献的検討を行った。

(2) 障害児保育に携わる保育者に対するフォーカス・グループ・インタビューの実施

上記の文献的検討に加えて、障害のある子どもの個別の指導計画の作成と、計画に伴う保育実践に関する課題について具体的に検討するために、障害児保育に携わる 5 名の保育者を対象としたフォーカス・グループ・インタビューを実施した。

(3) 信頼モデルを実装した個別の指導計画及び保育記録の様式試案の作成

文献的検討、フォーカス・グループ・インタビューの結果、及び先行研究（吉川，2014；吉川，2012）で示された実践上の課題を踏まえ、計画、記録、対話の一連の過程を通して、①集団適応に関連する子どもの姿のみを前景化するのではなく、ホリスティックな子ども理解ができること。②子ども理解の問い直し、再構成ができること。③記録に基づいた対話を通して、多様な子ども理解の視点が開かれていること、以上の 3 点を実践上可能としうる、個別の指導計画及び保育記録の様式試案を作成した。

個別の指導計画の様式（Fig.1 参照）では、実態把握の部分について、遊びへの参加、人とのかかわりなど、環境に対する子どもの能動性を捉える視点を中心に情報を記述するとともに、必要な合理的配慮について記述できるよう構成した。また、目標の記述部分については、特定の発達領域に対応させて目標を列挙するのではなく、環境に対する子どもの能動性と合理的配慮の 2 つの視点から、中心となる課題、包括的な目標を、保育者が検討できるよう構成した。保育記録（Fig.2 参照）は、写真付きのナラティブの様式とし、目標に関連しない子どもの姿も含めて、ホリスティックな子ども理解が可能となるよう構成した。

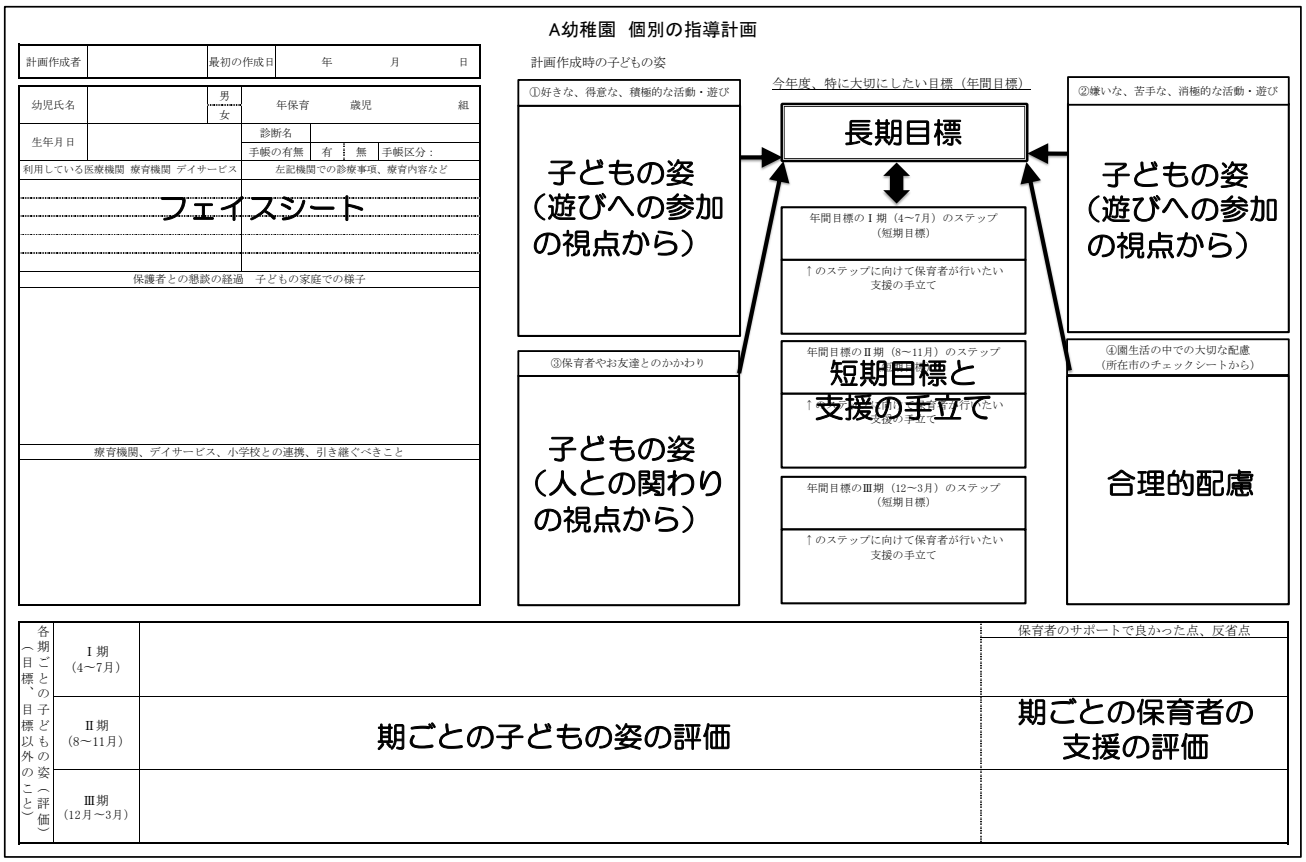

Fig.1 個別の指導計画の様式（A 園）

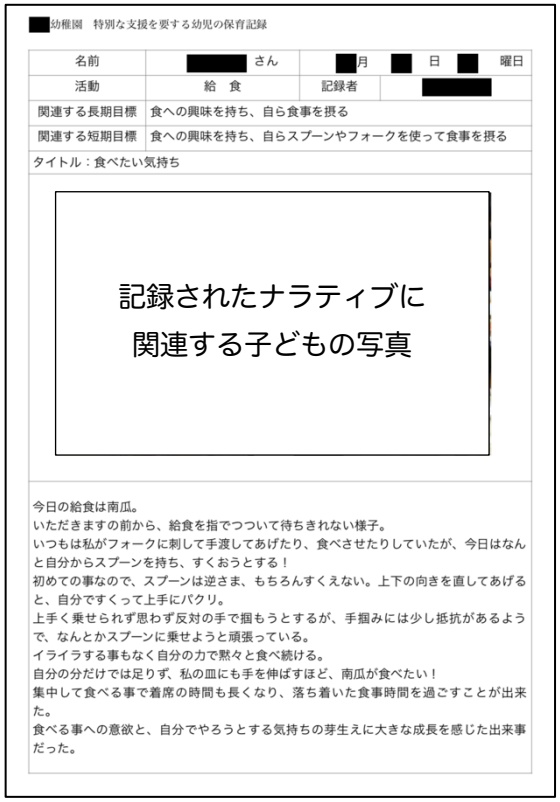

Fig.2 保育記録の様式、作成例（B 園）

(4) 信頼モデルを実装した個別の指導計画及び保育記録の様式試案を用いた実践

上記の様式試案を基に、統合保育を実施している幼稚園 2 園（A 園、B 園）において実践を行った。各園ともに、発達障害を有する子ども 3 名を対象に、以下の①～④の手続きのもと、およそ 6 ヶ月間の実践を行った。①対象児の個別の指導計画を作成する。②個別の指導計画に基づく

保育実践と並行して、保育記録を作成する。③作成した保育記録を基に、1〜2 ヶ月に一度、保育カンファレンスを行い、支援の振り返り、対話を行う。④保育カンファレンスでの振り返り、対話の結果を評価に反映させ、適宜計画の見直しを行い、次の保育へと繋げる。保育者が作成した計画、記録の分析に加えて、実践終了後、保育者へのインタビュー、アンケートを行い、実践に伴う保育者の子ども理解の変化について検討した

(5) 信頼モデルを実装した個別の指導計画、保育記録を継続することによる効果の検討

上記の 2 園とは別に、本研究開始前より、信頼モデルに基づく個別の指導計画、保育記録を導入し、実践を継続的に行ってきた認定こども園（C 園）を対象に、園長及び保育者へのインタビューを行い、実践の過程で生じた保育者の子ども理解の変化，幼稚園全体の保育の質の変容について検討した。

４．研究成果

(1) 保育者へのフォーカス・グループ・インタビューの結果

障害児保育に携わる保育者へのフォーカス・グループ・インタビューを通して、主に以下の 2 点が示された。

① 保育者は、障害のある子どもの保育について、子ども個々の育ちを尊重すると同時に、子どもを集団に位置付けつつ、必要な目標や支援を計画している。一方で、個と集団を同時に対象とする保育者の両義的な役割は、ときに保育者に対して、統合保育を困難にし得る葛藤を引き起こしている。

② 保育者は、個別の指導計画について、子ども理解を促進し、情報の共有を図るための重要なツールとして捉えている。一方で、限られた時間、人手のもとで、複数の保育者が参与し、子どもの姿を充分に記述できる体制を作ること、構想した計画を定型発達の幼児を含む集団活動の中で無理なく実現することを課題として捉えている。

(2) 信頼モデルを実装した個別の指導計画及び保育記録の様式試案を用いた実践の結果

A 園、B 園での、信頼モデルを実装した個別の指導計画及び保育記録の様式試案を用いた実践を通して、主に以下の 3 点が示された。

① 保育者は、保育環境に対する子どもの能動性を、様式試案を用いた一連の過程で言語化することを通して、定型発達と比較して「できる/できない」といった欠損モデルによる子ども理解だけではなく、遊び、人とのかかわり、合理的配慮など、多様な視点から子どもを理解し、目標と指導の手立てを構想しうることが示された。

② 子どもの理解の変容に伴い、特定のスキルを教えようとする実践だけではなく、保育環境の調整によって、子ども自身は手持ちの力のままで、生活をより充実させていく実践、あるいは子どもの自主性を尊重した実践が見られるようになった。

③ 事後に実施した、保育者へのインタビュー、アンケートからは、本研究の一連の実践過程が、自身の子ども理解に関する従来の見方に対する気付きをもたらしたこと、また、子ども理解の変化のきっかけとなったことが報告された。

(3) 信頼モデルを実装した個別の指導計画、保育記録を継続することによる効果

C 園における保育者、延長へのインタビューを通して、主に以下の 2 点が示された。

① 5 年間継続して信頼モデルに基づく個別の指導計画、記録作成に取り組んできた、保育者 2 名を対象に実施したインタビューからは、信頼モデルによる計画、記録の導入以前は、子どもができない、足りない部分に焦点を当てて、子どもを捉えることが多かったが、信頼モデルの視点により、子ども一人ひとりの保育への参加の姿を肯定的に捉えること、その姿から支援を構想することが習慣化したことが報告された。

② 園長へのインタビューからは、信頼モデルに基づく計画、記録の積み重ねは、遊びを通しての子どもの学びを保育者が意識する機会となり、設定保育中心から子どもの主体的な遊びを中心とした保育形態へと移行する契機となったことが報告された。また、遊び中心の保育形態への移行に伴い、移行前に行っていた、障害のある子どもを対象とした個別指導や、小集団活動の時間が減少し、全ての子どもが場を共有する時間が増加したこと、また、信頼モデルに基づく記録によって、子どもの能動的な姿を言語化し、対話を通して理解を深めていくことは、障害の枠を超えて、学級全体の子どもたちの姿を記述するクラス便りや，保護者に配信する保育記録にも拡がったことが報告された。

(4) 総合考察

信頼モデルを実装した個別の指導計画、保育記録の様式試案の導入は、保育者の、障害のある子どもに対する、集団に準拠した子ども理解を再構成し、実践を変容させる契機となることが、一連の研究結果から示唆された。障害のある子どもの姿を、生活の文脈から切り離された能力の「点」ではなく、生活全体の「面」で捉え、必要な支援について構想する、実践者の開かれた感受性を、実践者自身が可視化し、改変していくための計画、記録の在り方について、実践を通してさらに検討していくことが、今後の課題として挙げられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 吉川和幸・東重満・川田学	４．巻 14
２．論文標題 障害児保育における「信頼モデル」に基づく個別の指導計画及び保育記録の開発と実践	５．発行年 2020年
３．雑誌名 子ども発達臨床研究	６．最初と最後の頁 49-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://doi.org/10.14943/rcccd.14.49	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 吉川和幸・川田学・及川智博	４．巻 13
２．論文標題 障害のある子どもの「個別の指導計画」に関する保育者を対象としたフォーカス・グループ・インタビュー	５．発行年 2019年
３．雑誌名 子ども発達臨床研究	６．最初と最後の頁 23-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://doi.org/10.14943/rcccd.13.23	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大豆生田啓友・平野麻衣子・岩田恵子・上田俊丈・吉川和幸・榎沢良彦	４．巻 56
２．論文標題 保育フォーラム　保育学の研究方法論を考える（2）	５．発行年 2018年
３．雑誌名 保育学研究	６．最初と最後の頁 517-532
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.20617/reccej.56.3_229	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 川田学	４．巻 56
２．論文標題 エコロジカルシステムとしての「保育」の評価試論	５．発行年 2018年
３．雑誌名 保育学研究	６．最初と最後の頁 21-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.20617/reccej.56.1_21	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 吉川和幸・坂本歩美・井内聖
2．発表標題 幼稚園における障害のある幼児の「個別の指導計画」及び「保育記録」に関する実践研究
3．学会等名 北海道子ども学会第24回大会
4．発表年 2019年

1．発表者名 吉川和幸・上村毅
2．発表標題 障害児保育における「信頼モデル」による子ども理解
3．学会等名 日本保育学会第72回大会
4．発表年 2019年

1．発表者名 川田学
2．発表標題 ラーニングストーリーによる実践の変容：発達心理学からの提案
3．学会等名 日本保育学会第71回大会
4．発表年 2018年

1．発表者名 吉川和幸・川田学・及川智博・野屋敷結
2．発表標題 障害のある幼児の「個別の指導計画」に関するグループインタビュー －幼稚園、認定こども園の保育者を対象に－
3．学会等名 日本保育学会第71回大会
4．発表年 2018年

〔図書〕　計4件

1．著者名 川田学	4．発行年 2019年
2．出版社 ひとなる書房	5．総ページ数 248
3．書名 保育的発達論のはじまり	

1．著者名 汐見稔幸・大豆生田啓友（監修）大豆生田啓友・秋田喜代美・汐見稔幸（編著）清水益治・渡邉英則・宮里暁美・川田学・田代幸代・那須信樹・大方美香・市川奈緒子・門田理世・秋田喜代美	4．発行年 2019年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 242
3．書名 アクティベート保育学２ 保育者論	

1．著者名 本郷一夫（監修）須田治（編著）川田学・松熊亮・小野學・榊原久直・東敦子・佐竹真次	4．発行年 2019年
2．出版社 金子書房	5．総ページ数 120
3．書名 生態としての情動調整 心身理論と発達支援	

1．著者名 秋田 喜代美・馬場 耕一郎（監修）松井 剛太（編著）広瀬由紀・佐藤智恵・吉川和幸・小林徹	4．発行年 2018年
2．出版社 中央法規出版	5．総ページ数 126
3．書名 保育士等キャリアアップ研修テキスト３　障害児保育	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	川田　学 (KAWATA Manabu) (80403765)	北海道大学・教育学研究院・准教授 (10101)	
研究協力者	東　重満 (AZUMA Shigemitsu)		学校法人東学園 美晴幼稚園 園長
研究協力者	上村　毅 (UEMURA Takeshi)		学校法人星置学園 ほしおきガーデン星の子幼稚園 園長
研究協力者	井内　聖 (IUCHI Sei)		学校法人リズム学園 恵庭幼稚園 園長